HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	『ヴィルギナール』研究の歴史・現状・課題 : ブレーメン版の刊行に寄せて
Author(s)	寺田, 龍男
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 129, 115-134
Issue Date	2017-12-22
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.129.115
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/68101
Type	departmental bulletin paper
File Information	070-1882-1669-129.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

『ヴィルギナール』研究の歴史・現状・課題

－ブレーメン版の刊行に寄せて－

寺　田　龍　男*

【目次】

1．はじめに
2．「英雄叙事詩」の下位区分「ディートリヒ叙事詩」における『ヴィルギナール』
3．『ヴィルギナール』の内容
4．研究史
5．研究の現状と課題
6．おわりに

【キーワード】ヴィルギナール，英雄叙事詩，写本，校訂

1．はじめに

『ヴィルギナール』（Virginal）は13世紀に成立したと推定される英雄叙事詩である。現存する写本はいずれも14世紀と15世紀にドイツ語の様々な方言で書かれたものだが，原作の成立地は不明である。中世の文芸作品でよく見られるように，どの写本も作品の題名を表示していない。そのためかつては『ディートリヒと家来衆』（Dietrich und seine Gesellen），『ディートリヒの竜退治』（Dietrichs Drachenkämpfe）あるいは『ディートリヒの初陣』（Dietrichs erste Ausfahrt）ともよばれた。しかし現在では『ヴィルギナール』で統一されている[1]。その内容は後述するが，21世紀に入ってからジャンルとしての「英雄叙事詩」，中でもこの『ヴィルギナール』を含めてその下位区分を形成する「ディートリヒ叙事詩」の研究が活発化している。それはなぜか。あえてネガティヴないい方をすれば，従来の研究があまりにも停滞していたため，本来さほど多いとはいえない数の研究書や論文が，前世紀と比べて格段に増えたように感じられるのである。ではなぜ停滞していたのか。その最大の理由は，信頼できる校訂版が存在しなかったことにある。『ヴィルギナール』は現在までに合計13点の写本が確認されているが，そのうちもっとも重要なハイデルベルク写本（V_{10}）については，従来の研究では1870年に刊行された校訂版が用いられてきた[2]。だがこの版では，校訂したユーリウス・ツピツァが，底本にも他のいかなる写本にもない表現を随所に埋め込んでいる。すなわち現在までのほぼ150年間，改変のおびただしい版に頼らざるをえなかったのである。

ツピツァが編纂した当時は，まだ作者によるオリジナルの復元や現存写本の共通祖型（アーキタイプ）を再構成することが理想とされており，そうした志向は後の研究にも強い影響を与え続けた[3]。今日であれば特定の写本の文言を忠実に再現する，すなわち実証的な校訂版を編

* 北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院教授
DOI：10.14943/b.edu.129.115

纂するのが常識である。記述の解釈が困難な場合，これを他の写本に依拠して改変するならまだしも，恣意で書き改める行為は許容されない。写字生の誤記であることが明瞭な場合でも，その旨を注記するのが一般的である。はたして『ヴィルギナール』の研究は時代が進んでも停滞し続ける。時折研究者の関心を惹くことはあっても，後述するヴィルマンス，フォン・クラウスやクーンなどを除くと，本文批判とは直接かかわらない方向でしかなしえなかったのだと思われる。

筆者はツピツァの方針を断罪したいのではない。当時のドイツにおける学術思潮の中で，たとえば言語学者たちがゲルマン祖語の再構成を目指したのであれば，文学の研究者たちも各作品のオリジナルや祖型の復元を目標にしたことは理解できる。また私たちを含む後の世代は，いかなるものであれ，先行研究には敬意を払うべきである。とはいえツピツァの校訂版によって厳密な立論をすることが困難であるのもまた事実といわなくてはならない。写本では文意の解釈が困難な場合が多々あるが，前後の脈絡が通るようツピツァが処々で工夫したおかげで，私たちはもしかすると作者のオリジナルに近い形態を手にしたのかもしれない。しかし所詮，残存資料で実証も確認もできない文言を含むテクストに全幅の信頼を寄せることはできない。日本文学の研究者後藤康文の論を借りれば，「研究において今何よりも急がれるのは，その基盤となる本文の整備にほかなるまい。(…) 正確に解読されていない作品を，どうしてまともに論じられようか」[4]といわざるをえない状況だったのである。

しかし本年（2017年），ブレーメン大のエリーザベト・リーナートを中心とするグループが，ドイツ研究振興協会（Deutsche Forschungsgemeinschaft）の助成によりディートリヒ叙事詩の諸作品を新たに編纂するプロジェクトの一環として，『ヴィルギナール』の主要3写本のテクストを忠実に再現する校訂版を刊行した[5]。これまで縷々述べてきた諸問題を一挙に克服するテクストを世に送った同グループには深い敬意を表したい。その意義をあらためて力説する必要はなかろうが，従来の成果の検証を可能にしただけでなく，研究者が踏み込めずにいた方向へ発展させる基盤が整備されたことの意味は大きい。今世紀に入って『ヴィルギナール』の研究が「活発化」した理由も，本版刊行への期待にあったといえよう。そこで小稿は研究史上の諸問題とそれらをめぐる現在の状況，そしていくつかの課題と将来の可能性を論じる。とりわけ書記伝承と校訂に重点を置く。この作品とその研究を日本で紹介する意義はそこにあると考えるからである。そして最後に若干の私見を述べる。

2．「英雄叙事詩」の下位区分「ディートリヒ叙事詩」における『ヴィルギナール』

ドイツ語圏の「英雄叙事詩」（または「英雄詩」）[6]では『ニーベルンゲンの歌』がジャンルを代表する作品である。その代表的な3写本A・B・Cは2009年ユネスコの「世界の記憶」に登録されており，藤原道長の日記『御堂関白記』の原本（2013年登録）などに並ぶ文化遺産として認知されている。日本でも『ニーベルンゲンの歌』は明治時代すでに知識人の間で知られており[7]，中世ドイツ文学の作品としてはもっとも早く原典からの翻訳が刊行されている[8]。また翻訳の種類もこの時代の文芸作品としてはきわめて多い[9]。高等学校の世界史の教科書にも言及があるのは[10]，『ニーベルンゲンの歌』が今なお世界文学の古典として人々の心にうっ

たえる力が強いことの反映といえよう。

これに対して「ディートリヒ叙事詩」は，東ゴート人の王テオドリクス（451/453-526年）を祖型とする伝説の英雄ディートリヒ・フォン・ベルンを主人公とする作品群である。1200年頃成立した『ニーベルンゲンの歌』の影響を受けて数々の物語が作られ，また同じ作品でも様々な異本があること，すなわち系統分化の広まりが大きいことで知られる。ただ，写本伝承のあり方などを研究する者には興味深いジャンルであるものの，研究者の関心はおしなべて低かったといわざるをえない。これを『ヴィルギナール』を例として検証しよう。すでに述べたように，リーナートを中心とするブレーメン大のグループが今世紀初頭からディートリヒ叙事詩諸作品の新しい校訂版を編纂しており[11]，最新の成果として『ヴィルギナール』（および『ゴルデマール』）の校訂版も刊行された。しかしその文献表で確認できる関連研究は，最古の校訂版（断片写本V_{3e}，1746年）以来，直接間接にこの作品を対象とする研究書や論文を含めても100に遠く及ばないのである[12]。これに対して『ニーベルンゲンの歌』の場合は1945年以降だけでも，翻訳などを含めた文献が3000を超えている[13]。「世界の記憶」に写本が指定された作品は別格といってしまえばそれまでだが，この差はあまりにも大きい。それはなぜだろうか。

端的にいえば，『ヴィルギナール』を含む「ディートリヒ叙事詩」の諸作品は『ニーベルンゲンの歌』の素材史を研究する中で副次的な位置づけしか与えられてこなかったのである。長い間，『ニーベルンゲンの歌』の研究それ自体がドイツ語圏でも日本でも素材史に集中していた[14]。さらにあえて乱暴ないい方をすると，『ニーベルンゲンの歌』では恋愛や武勇といったいわば宮廷文芸に定番の主題だけでなく，愛憎のもつれや人間関係の破綻，忠誠心の葛藤，そして破滅など，読む人聴く人の心にうったえる要素がいくつも盛り込まれており，作品をいわば「人間ドラマ」として解釈することが可能である[15]。これに対してディートリヒ叙事詩の諸作品は『ニーベルンゲンの歌』のスケールに到底及ばないと認識されたことが，研究者の注意や関心を惹いてこなかった理由であろう[16]。また同じディートリヒ叙事詩でも『ニーベルンゲンの歌』との関連性が強い「ディートリヒの歴史叙事詩」（historische Dietrichepik，以下「歴史叙事詩」）に対して，『ヴィルギナール』を含む「ディートリヒの冒険叙事詩」（aventiurehafte Dietrichepik，以下「冒険叙事詩」）は，『ニーベルンゲンの歌』から受けた影響は大きいものの，素材史の観点では関連性がはるかに薄い。これが関心の高まりをさらに妨げる要因となったことは間違いない。

中世文芸では少なからぬジャンルでそのトップランナーとなった作品が（現代の）読者にとりもっとも印象深く[17]，あとに続く世代の作品は「亜流」（エピゴーネン）とみなされ，研究書でもそうした主観的な表現がごくふつうに用いられる時代があった[18]。今日の研究者であれば，さすがに作品の「価値」を主観的に判断するようなことはまずない。筆者が上で「あえて乱暴ないい方をすると」とことわりを入れたのもそのためである。だが『ヴィルギナール』を「読むと眠くなる」（ermüdend zu lesen）のは「公然の秘密」（kein Geheimnis）と率直に語るペーター・K・シュタインのような研究者もいる[19]。仮にそのとおりだとして，ではこの作品はいかなる理由で「眠くなる」のだろうか。

それを考えるためにはまず作品の内容を知る必要があるので，以下にその梗概を記す。なお上述のように，『ヴィルギナール』には現在までに確認された13の写本（V_1からV_{13}）がある。そのうち3点（V_{10}，V_{11}，V_{12}）が，いくつかの欠行・欠節はあるもののほぼ完本の形で残っており，残る10点は断片である[20]。（ただしV_3の一部とV_8は逸失した。）ここではもっとも頻

繁に分析の対象とされてきたハイデルベルク写本（V_{10}）を中心に概略を記し，その上でドレスデン写本（V_{11}）とウィーン写本（V_{12}）の特徴にもふれることにする。

3．『ヴィルギナール』の内容

(1) ハイデルベルク版（V_{10}）の内容は以下の通りである。

異教徒オルキーゼは，女王ヴィルギナールを中心とする小柄な人々の国（国名は挙げられていない）に対し，毎年乙女一人を供出するよう強いてきた。女王以下はやむを得ずそのつど乙女を籤で選んでいた。

一方ベルン（今日イタリアのヴェローナ）の宮廷では，若い主君ディートリヒ・フォン・ベルンが侍女たちから冒険譚を聞かせてもらえるかと尋ねられて困惑する。そのような冒険や貴婦人への奉仕に何の意味があるのかと軍師ヒルデブラント[21]に詰め寄り争った挙句，結局ディートリヒはヒルデブラントとともにチロル地方に向けて出立する。異教徒に侵入されたヴィルギナールの国を救うためである。

ヒルデブラントは異教徒を討ち殺して籤運が悪かった乙女マティクスを救う。この間ディートリヒも異教徒の軍団に遭遇するが，ヒルデブラントの助けを得てこれらを倒す。乙女は両者を女王ヴィルギナールの宮殿があるイェラスプントへ招く。先に着いた乙女がヴィルギナールに事の次第を報告すると，女王は使者ビーブンクをディートリヒとヒルデブラントに送る。

女王の許へ向かう途中，ディートリヒとヒルデブラントは遭遇した竜と戦う。その際ヒルデブラントは，竜の口に下半身をのみ込まれて絶体絶命の騎士レントヴィンを間一髪救う。レントヴィンはヒルデブラントの甥ヘルフェリヒとその妻ポルタラフェの息子だった。3人はヘルフェリヒの居城アローネへ向かい，歓待される。ビーブンクもやって来てヴィルギナールの正式な招待を伝える。14日間の滞在の後，ディートリヒとヒルデブラントはイェラスプントへと出発する。

ヒルデブラントより先に到着したいと早まったディートリヒは道に迷ってしまい，挙句に巨人ヴィクラムに捕らえられ，大公ニートガーが支配するムーター城へ連行されてそこで虜囚の身となる。ニートガーにはヴィクラムら巨人が番人として仕えていた。イェラスプントに着いたディートリヒの家来衆は，主君が来ていないことに気づく。だが彼らには，ニートガーの妹イベリーンの助けを得たディートリヒが事情を知らせる書状を送る。家来衆に加えてハンガリー王イーミーアーンやビテロルフとディートライプ父子などがディートリヒを救いに続々と馳せ参ずる。城を守る巨人たちとの間で，ニートガーから解放されたディートリヒも含め勇士たちは11度の一騎打ちを行い，すべてベルン側が勝利する。ニートガーは所領をディートリヒから封土として安堵される。イェラスプントに着く前，再び巨人と11度の一騎打ちが行われるが，すべてに勝利する。また新たに現れた竜とも戦い，これらを退治する。物語の末尾で一行はようやくヴィルギナールに迎えられ，豪華な宴が催される。だがベルンが包囲されたという知らせにより，ディートリヒらは急ぎヴィルギナールの許を去り，故国に戻る。（全1097詩節）

(2) ドレスデン版（V11）も大筋ではハイデルベルク版と同様である。しかし相違点もある。

この写本も残酷な異教徒の話から始まるが，ディートリヒが宮廷の女性と会話を交わす（そして恥じ入る）という場面はない。軍師ヒルデブラントが危機を報告すると，ディートリヒは率先して出陣する。裕福な人物が支援を申し出る場面もある。ディートリヒがヒルデブラントの助けにより異教徒を倒したあと，あやうく竜にのみ込まれそうになったレントヴィンがヒルデブラントの助けにより窮地を脱する。ディートリヒがアローネに滞在した後でパレルノのリベルティンの挑戦を受けこれを打ち負かす。（2人は友誼を交わす。）イェラスプントに向かう途中で一行は獅子と戦う。また待ち伏せしていた異教徒オルキーゼの息子ヤナパスとその家来衆とも戦う。勝利の後，オルキーゼによって拉致されていた女王の侍女3人を解放する。ディートリヒは猪を狩り，また狩猟権を主張する巨人をも打ち負かすが命乞いは受け入れる。（本版ではムーター城で主人公が苦しめられる部分が欠如している。）物語は最後にディートリヒと女王が結婚する。

なおこの写本では，女王の名前が最後まで出ない。また末尾にこの版のみの特異な記述がある。老臣ヒルデブラントは主君が新婚初夜を無事に済ませるかと案じてその床の下に這い入る。はたして妃は乙女のままだったため，翌朝彼は何もしなかった主君を咎める。その晩は夫婦の契りが結ばれ，再び寝台の下に入ったヒルデブラントも喜んで物語は終える。

ドレスデン版は全体で130詩節とハイデルベルク版の8分の1弱であり，ダイジェスト版のような印象はぬぐえない。実際最終節では，本来典拠にあった408詩節から過剰な語を削って130に縮小したという表記がなされている。

(3) ウィーン版（V12）は，現在の通説ではハイデルベルク版とドレスデン版の混態本とされる[22]。ここでも主人公たちが異教徒や竜と戦い，若い騎士を救ってアローネで歓待される筋立てはハイデルベルク版およびドレスデン版と共通である。ただし他の題材の細部や配列には独自性が強い。最後にディートリヒとヴィルギナールが結婚する。（全861詩節[23]）

これらの完本3写本を除く断片写本（V1からV9およびV13）がほぼハイデルベルク写本に対応する内容であることから，書記伝承の主流はこの系統だったとみられる。残存写本の言語はアレマン方言・ラインフランケン方言・東フランケン方言・低地ライン方言・シュヴァーベン方言・バイエルン方言など比較的広い領域に分散している[24]。小稿の冒頭では作品の成立地が不明と述べたが，シュヴァーベン・アレマン語圏と推定する研究者もいる[25]。『ヴィルギナール』はチロル地方が主な舞台なので，成立地がシュヴァーベン・アレマン語圏だとしてもけっして不自然ではない。しかし他のディートリヒ叙事詩諸作品は成立がやや東寄りと想定されるものが多いことから，目につく特徴である。

また同じジャンルの『ズィゲノート』などが15世紀以降印刷本として好評を博したのとは異なり，この作品の印刷本は残されてない。先に引用した「読むと眠くなる」という印象を当時の人々も受けたのであれば，おそらく印刷されることはなかっただろう。しかしそれではなぜ写本が13点も残ったかが説明できない。この点の完全な解明はもとより困難ではあるものの，今後もひとつの課題でありつづけるだろう。

なお梗概からはわかりにくいが，どの版でも若いディートリヒが経験を積み，ヒルデブラントに教え導かれる様子が繰り返される。しかし語り手や受容者のもっとも大きな関心が，主人

公たちが様々な戦いを勝ち抜くさまにあったことはまず間違いない[26]。まさにこの戦いとそれにまつわるエピソードの繰り返しゆえに，シュタインのような読者は「眠くなる」のであろう。

『ヴィルギナール』は中世ドイツの多くの文芸作品と同様に韻文で書かれている。日本語とはまったく異なる言語であるので，煩瑣にならない程度でこの点も略述しておきたい。現存写本のほとんどが「ベルンの調べ」（Bernerton）という詩形式で構成されている[27]。これは１詩節が13行から成り，各行で母音のアクセントの有無による揚格と抑格が交代する。原則として１行に揚格が４つある。そして各行の末尾が脚韻を形成する。さらなる詳細は割愛するが，韻律の概略をハイデルベルク写本（V_{10}）の冒頭第１節で示すと以下のようになる。（なお脚韻を構成する語には筆者が下線を引き，共通部分をアルファベット（AABCCBなど）で示す。また中世写本の多くと同様，原文には文と文の境を示す標識（ピリオド・コンマ・コロン等）がない。これらは校訂者が便宜のため補足したものである。）

Das ich uch sage, das ist war:（A）	私がみなさまにお話しすることは真実です。
Es wuohs[28] ein heiden xii jor（A）	ひとりの異教徒が12歳になり
zuo schaden manigem manne.（B）	多くの男に災いをもたらした。
Do der zuo sinen tagen kam,（C）	成人に達すると，
der lant er vil an sich gewan.（C）	この男は多くの国々を我がものにした。
Des reit er ie von danne,（B）	それから彼はいつも馬を駆り，
gein einem gebirge in einen dan,（D）	賞賛と名誉を得るため
erwerben pris und ere.（E）	山々の奥の森の中へ入った[29]。
Mit ime rittent ahtzig man,（D）	同行した者は80名，
der was minre noch mere.（E）	まさにその数であった。
Su worent alle kúne tegen（F）	彼らはみな勇敢な戦士で
und hettent lihten harnesch an（X）	輝く甲冑を身にまとい
und do by strites sich erwegen.（F）	戦う決意を固めていた。

脚韻をよく見ると，１行目と２行目の母音が一致していない。また４行目と５行目の末尾の子音も異なる。しかしこの程度の相違は逸脱とは見なされず，許容されていた。実際，完全に定形どおりのパターンで韻律が構成されている詩節はごく少数である。（韻律は次章でふたたびとり上げる。）

ベルンの調べで構成される作品としては他に，いずれもディートリヒ叙事詩に属する『ゴルデマール』・『ズィゲノート』・『エッケの歌』がある。これらに加え，「ドレスデン英雄本」に収録された『大公エルンスト』もベルンの調べで構成されている。『大公エルンスト』の他写本における韻律は単純で，通常は各行で抑格と交替する４揚格が現われる他は２行１単位の脚韻のみである。「ドレスデン英雄本」所収の作品すべてがベルンの調べで構成されているわけではないが，制作者にこの韻律を用いる志向があった可能性は否定できない[30]。ベルンの調べは時代が下ると職匠歌人の作品でも用いられた。複雑な韻律でありながら，この形式が当時の人々から広く受け入れられ，また伝統として一定程度の確立をみたことの証拠といえる。

4．研究史

現状と課題に入る前に，当然ながら研究史にもふれておかねばならない。研究の基礎となる3つの完本の校訂版をみると，今日もっとも重要とされるハイデルベルク版（V10）の（当時としての決定版の）刊行はすでに述べたように1870年である。ツピツァ版の「長所」は，底本の各語彙を中高ドイツ語の標準形に整え，本文における韻律の乱れを調整し，さらに詳細な解説と登場人物の名簿および簡易ながら辞書を付していることにある。これに先立つ1855年，同じ写本をフリードリヒ・ハインリヒ・フォン・デア・ハーゲンが校訂した版が刊行されていた[31]。だがツピツァは自らの校訂版の序文でフォン・デア・ハーゲンの編纂の仕方を厳しく批判している。曰く，他の写本を必ずしも参考にはせず，明らかな誤りも訂正していない，文法も不正確，などである[32]。この版については現在でもシュタインが，写本からの逸脱が多いと編者フォン・デア・ハーゲンを批判している[33]。フォン・デア・ハーゲン版は結局ツピツァ版に取って代わられ，事実上その役割を終えている。しかし小稿の冒頭で述べたように，ツピツァの編纂方針も今日の研究水準にはそぐわない。写本自体に問題があるとツピツァは考えており[34]，それゆえに本文の大胆な改変を正当化できると考えたのであろうが，やはり批判は免れえない[35]。

これに対してドレスデン版（V11）はさらに古く1825年[36]，ウィーン版（V12）も1860年[37]に校訂版が刊行されている。この事実が示すように『ヴィルギナール』の諸写本の存在は早くから知られており，それらの校訂と刊行も『ニーベルンゲンの歌』の初期の校訂版と比べてけっして大きく遅れたわけではない。当時の人々の『ニーベルンゲンの歌』とその関連作品に対する関心の高さによると解釈しても誤りではあるまい。さらに，ドレスデン版やウィーン版の刊行が早かった理由には，それぞれを含む写本に大きな関心が寄せられていたという事情もある。ドレスデン版の『ヴィルギナール』はその名の由来である「ドレスデン英雄本」（1472年ないし1472-80年成立，ザクセン州立図書館蔵）に，そしてウィーン版は「リーンハルト・ショイベルの英雄本」（1480-90年成立，オーストリア国立図書館蔵）という，どちらも主として英雄叙事詩の諸作品から成る有名な集合写本に掲載されたものである[38]

「ドレスデン英雄本」と「リーンハルト・ショイベルの英雄本」だけでなく，ハイデルベルク版『ヴィルギナール』の単独写本（V10所収，1444-48年にアルザス地方ハーゲナウ（Hagenau：フランス語でアグノー：Haguenau）のディーボルト・ラウバーの工房で成立，ハイデルベルク大図書館蔵）も，13点の写本の中では成立が遅い方である。『ヴィルギナール』の現在までに知られる写本は，小稿冒頭でも述べたように，逸失して確認できないものを除くとすべてが14・15世紀に成立している。私たちが今校訂版によりまとまった作品として読むことができるものが，いずれも書記伝承の最後に位置することに注意する必要がある。それはなぜか。先に断片写本のほとんどがハイデルベルク写本の本文に対応すると述べたが，同じ系統の中での成立順はハイデルベルク版が最後である。したがって断片写本が完本の影響を受けたのではなく，断片写本が先行し，それらと共通する記述がハイデルベルク写本に残ったというのが実態だからである。

さて小稿第2章では，ディートリヒ叙事詩の研究が『ニーベルンゲンの歌』の素材史を研究する資料としての性格を帯びていたことにふれた。これについてハイデルベルク版『ヴィルギナール』（V10）を見ると，以下の点を挙げられよう。

ディートリヒ・フォン・ベルンやその軍師ヒルデブラント，さらにその甥のヴォルフハルトらはどちらの作品にも登場する。また小柄な人物（アルブリーヒや女王ヴィルギナールなど）が重要な役割を果たす点も同じである。『ニーベルンゲンの歌』ではハゲネがジーフリトについて，巨人12人を倒したと語る（94節）。『ヴィルギナール』でも主人公ディートリヒらが11人の巨人を相手に戦う場面が2度描かれる（719-767節・864-892節）。また細かな点ではあるが，『ニーベルンゲンの歌』では討ち負かした竜の血を浴びたジーフリトの皮膚が角質になったというエピソードが語られる（100節）。一方『ヴィルギナール』でも異教徒オルキーゼの剣が竜の血で硬く処理されたと記されている（37節）。主人公らが竜と戦う場面も2度ある（143-176節・895-914節）。この竜の血で硬くするというモチーフは，ディートリヒ叙事詩では他に『エッケの歌』（E$_2$版）に記述があり，ヴォルフディートリヒの鎖帷子が竜の血により硬くなったとある[39]。ちなみに同じ題材は『ニーベルンゲンの歌』よりも成立が早い司祭ランブレヒトの『アレクサンダー物語』（フォーラウ版1160年頃，シュトラースブルク版は若干遅く12世紀末の成立）でも見られる。そこでは大王アレクサンダーの胸甲が竜の血で硬くなったと記される[40]。ジーフリト伝説に由来するかどうかは不明だが，この素材が当時の社会でよく知られたものであることは間違いない。

しかし全体として，『ニーベルンゲンの歌』と『ヴィルギナール』の間の関連性は高くない。「歴史叙事詩」の『ディートリヒの敗走』と『ラヴェンナの戦い』は『ニーベルンゲンの歌』の前史として構想された作品であるから，当然ながら共通する人物や設定が多い。これに対して「冒険叙事詩」では『ニーベルンゲンの歌』の内容を前提とする度合いに大きな違いがある。『ヴォルムスの薔薇園』のようにクリームヒルトやジーフリトが登場するほか詩節形式も近く，『ニーベルンゲンの歌』の強い影響が明らかな作品はある[41]。しかし『ヴィルギナール』の場合は娯楽的要素が強く前面に出ている。また『ニーベルンゲンの歌』も「冒険叙事詩」に属する諸作品も伝本は多数あるものの，両者が共に載るものは先に挙げた「リーンハルト・ショイベルの英雄本」1点しかない。当時の人々は『ニーベルンゲンの歌』と「冒険叙事詩」を基本的に異なるジャンルと意識していたと考えられる。

『ヴィルギナール』の研究史においては，『ニーベルンゲンの歌』との関連よりもむしろ，各写本に残されたテクストの生成史の方が重要である。本稿第1章でふれたヴィルマンスらによる研究には，今日の研究者は概して批判的なのだが[42]，その展開は注目に値すると考えられるので，以下にその概要を記す。

ヴィルヘルム・ヴィルマンスは，ハイデルベルク版（V$_{10}$）の最初の約250節とその後の詩節で，脚韻のあり方が異なることに気づいた[43]。すなわち250節までは文末の脚韻が多くの場合単音節で形成されるのに対し，それ以降は2音節の語が脚韻を構成する傾向が強まる。これを具体的に示すと以下のようになる。（原文はヴィルマンスが依拠したツピツァ版による。）

Daz ich iu sage, daz ist wâr. / ez wuohs ein heiden zwelef jâr （1節1－2）
(X)|Ẋ　X|Ẋ X|Ẋ　X　|Ẋ　(X)|Ẋ　　X　|Ẋ X　|Ẋ X|Ẋ

Sî trœstent iuch und heizent sagen / wie vil der wurme sî erslagen （263節1－2）
(X)|Ẋ　X|Ẋ　　X　|Ẋ X　|Ẋ X　　(X)|Ẋ　X　|Ẋ　X|Ẋ X|Ẋ X
彼ら（ディートリヒとヒルデブラント）は励まして伝えるよう求めています。彼らがいか

に多くの竜を退治したかを（…）。

上がヴィルマンスのいう250節までの韻律の標準形で，下がそれ以降で強まるパターンである。Xの上に点がついていればアクセントがある揚格であり，ないのが抑格である。（冒頭の（X）は任意の音節であり，なくても美的感覚は損なわれないが，多くの行にはこの１音節がある。）250節を境とするパターンの違いは，行の最後の脚韻（上が$\dot{X}$のみで，下が$\dot{X}X$）である。ヴィルマンスによれば，$\dot{X}X$タイプの脚韻が現われる頻度は１-250節で６例しかないのに対し，251-500節で64，501-750節で68，751-1000節で79，1001-1079節で40に高まる[44]。この結果により，前後２つの部分は同時に成立したのではなく，ハイデルベルク写本のテクストは両者が縫合されたものであるとヴィルマンスは考えた。

これを受けてカール・フォン・クラウスがさらなる仮説（重層理論Schichtentheorie）を展開した[45]。ハイデルベルク版冒頭の（ウィーン版およびドレスデン版と共通する）233節（ヘルフェリヒとレントヴィン父子の居城アローネで歓待されるディートリヒらにヴィルギナールの使者ビーブンクが正式な招待を伝え，これに応じるところ）までは，フォン・クラウスによれば作品の根幹をなす最古の基層（A）であり，技巧に優れたアレマン方言の詩人によって書かれた。しかしその後，大雑把ではあるが着想が豊かな別な詩人（東ライン方言の人物で14世紀前半の断片V_3テクストの作者，またはその原作者）がこれを改変してさらに書き継いだ（B）。しまいにアレマン方言の別の詩人（15世紀初頭のV_7テクストの作者または原作者）が粗雑な仕方で継ぎ足しをした（E）。本文で頻繁に表れる使者・手紙・歓迎の宴などはこの人物に由来する，とフォン・クラウスは見る。ちなみにドレスデン版およびウィーン版のみに見られるエピソード（異教徒ヤナパスらとの戦い，猪狩りとこれに続く巨人との戦いなど）はさらに別な詩人（東フランケン方言の人物か）に由来するという（C）。

約50年後，フーゴ・クーンがこのテーマに取り組む[46]。クーンはフォン・クラウスの見解をさらに押し進めて基層（A）を２つに分割し，竜にのまれかけたレントヴィンを救う場面を，それ以前の物語に付け加えられたものとみなす。

以上が重層理論の概略である。この理論が今日では批判されていると記したのは，たとえ仮説としては興味深くかつ説得力があるように見えても，実証することができないからである。たしかに，断片写本（上に挙げたV_3やV_7）の記述をハイデルベルク版で対応する部分の祖型とみなすことは可能である。しかしこれをもって合計1097節を有する長大なV_{10}版全体の生成史を解明したと考えることには，やはり無理があるといわなくてはなるまい。加えてすでに繰り返し指摘したように，ツピツァは底本におびただしい改変を施している。（ブレーメングループによる校訂版ではそれらがすべて註記されている。）信頼性の乏しいテクストに基づく仮説が受け入れ難いのは当然である。しかしそれでもここであえて記述したのは，ヴィルマンスに始まる『ヴィルギナール』生成史の研究がきわめて緻密であり，かつまた校訂版に忠実に依拠している点で「実証的」だったからである。そこではハイデルベルク版の脚韻のタイプや語彙の分布傾向など，莫大なデータが示されている。ヴィルマンス，フォン・クラウス，クーンの示したデータは新しい校訂版による検証を必要とするが，その後の研究の土台を作った功績は評価されるべきだろう。主要３写本の系統分析は今後も議論されることが確実であり，彼らの研究は先行業績としての意義を失わないと考える[47]。

5．現状と課題

ブレーメングループが刊行した新しい校訂版は，3つの写本を忠実に再現するという原則に立つ。それゆえ彼女たちは，テクストの表現を「標準化」する手法をとらない。いずれも15世紀半ばから後半にかけて書かれた写本である以上，これらの言語を13世紀初頭の教科書的な形態に変えることは不可能であるだけでなく，むしろ不自然である。ここまでは，現在であれば他の作品を校訂する場合でもルーティンワークである。しかしリーナートらはさらに一歩踏み込み，底本とした写本の表現が誤記である可能性が高い場合でも改変は極力避けて，考えうる意味を脚註で挙げるという原則により3写本を校訂する。その結果，とりわけハイデルベルク版写本の本文が忠実に再現されることとなった。註記が乏しくどこをどう改変したかが見えないツピツァの校訂版に比べて，信頼性は格段に向上した。したがって今後の課題を挙げるなら，従来のツピツァ版に依拠してきた研究の成果を（たとえ最新のものであっても）新しい校訂版によって検証しなおすことであろう。

しかしブレーメングループは同時に，写本テクストそのものの信頼性にも疑問を投げかける。3つの完本の中で一番分量が多く，したがって記事の内容ももっとも豊富なハイデルベルク写本が，同時に数多くの問題をかかえているからである。一般にある作品の校訂版をなす場合，複数のテクストを比較校合して「最良」のものを選び，その本文を忠実に再現するというのが通念である。しかし『ヴィルギナール』のハイデルベルク写本は，分量の点でこれに匹敵するものが他にない。またすでに述べたように，ツピツァが取り組んだ当時すでにその大きな問題が明らかになっていた。たとえば代名詞の性・数・格が指示する名詞や文法構造に合わない，韻律（ベルンの調べ）のあるべきパターンから逸脱する，などの問題が写本全体に見られる。写字生の作業の仕方は念入りとは到底いい難い。それゆえツピツァがいたるところで本文を改変したのは，やむをえないどころか，彼としては最善を尽くしたつもりだったかもしれない。ツピツァの改変がどのようなものだったかを示す例として，まず26節4－5行を挙げる。比較のためブレーメン版の同じ箇所も引用する。

von eime heidenischen man, / den strîtes nieman tar bestân:（ツピツァ版）
X | Ẋ X | Ẋ X|Ẋ X | Ẋ X | ẊX | Ẋ X | Ẋ X|Ẋ
ひとりの異教徒（によりしばしば惨事が起きた），この男とは誰も戦おうとしない。
von eime heideschen mane / den strites nieman getar beston.（ブレーメン版）
X | Ẋ X| Ẋ X X | Ẋ X X | ẊX | Ẋ X X|Ẋ X|Ẋ

次に97節7行をツピツァ版とブレーメン版から引用する。

durch wilden varn, durch stoc unt stein （ツピツァ版）
X | Ẋ X | Ẋ X | Ẋ X | Ẋ
力まかせの突進により，また槍と石（を投げること）により
durch wilden varn, durch stock und durch stein （ブレーメン版）
X | Ẋ X | Ẋ X | Ẋ X X | Ẋ

それぞれ下のブレーメン版と比べると，ツピツァが韻律を整合させるため原表現を複数の箇所（韻律に下線を引いたところ）で変更していることがわかる。しかしリーナートらはそうした介入を避け，元のテクストのままで理に適う意味を見出そうとする。はたして写本のままでは，意味は通るものの下線部が韻律として不自然である。また26節 4－5 行では脚韻（mane / ［be］ston）も整合しない。このような例は，実はおびただしいほどある。不自然な韻律自体は，どんなに良質な写本でも存在する。しかし韻律以外の要素も含め，ハイデルベルク写本の問題は度を越しているというべきである。ブレーメングループの校訂版では，解読が困難な表現については脚註でしばしば疑問符つきの文意が提案されている。やむをえないことであろう。校訂版の対象となった写本はとかく「権威ある」，「良質な」テクストであると思い込みがちだが，このたびの新しい校訂版は，写字生が常に（今日的な意味で）良心的かつ正確を期する仕事をするわけではないという事実を示した[48]。

私見であるが，もしこの写本の筆者 3 名が韻律を意識しながら書いていれば，混乱ははるかに少なかったであろう。代名詞の書き誤り（たとえば男性・中性与格のim［現代語のihm］をin（［現代語では男性対格のihnまたは複数与格のihnen］としたこと）が頻繁に見られる点などを考え合わせると，彼らは書写の作業に集中していなかったのではないかという疑問がわき起こる。時には書写しながら同時に創作することもあり，とくに中世後期ではその傾向が強まるが，この写字生たちがその例に該当するとは考えられない。書写と創作を同時に行うのであれば，字句の表記には細心の注意がなされるはずだからである。この点については他の作品およびその写本の例や，異なる社会の類似現象を参考にしてさらに考察を続けたい。

なお生成史以外でも，すでにいくつかの課題が提起されている。この作品における「冒険」（âventiure）の定義の問題[49]，若いディートリヒに対する軍師ヒルデブラントの教育や貴婦人への奉仕を論じたもの[50]，テクストの文化をジャンル交差の視点からとらえた論[51]，しばしば登場する使者やコミュニケーションの問題[52]，写本の図像に光を当てるもの[53]，物語論によるもの[54]などがある他，ウィーン版をハイデルベルク版とドレスデン版の混態と見る通説を批判する研究も若手研究者により進められている。これらのアプローチは新たな問題提起として，さらなる実りを結ぶことが期待される。

6．おわりに

これまで縷々述べてきたように，『ヴィルギナール』の研究は間違いなく新しい段階に入った。しかし同時に，作品の複雑な容貌と取り組みの困難さも明らかになった。異なる文化圏に属する者がこの作品に取り組むことで何が期待しうるか。その可能性を最後に述べておきたい。

まず筆者にとりもっとも興味深く，またここに紹介することで他分野の研究にも資することが可能と思われるのは，書記伝承のあり方である。『ヴィルギナール』は残存写本がすべてベルンの調べという複雑な韻律形式で構成されている。これが朗詠されたことは，どのような音曲だったかは別にしても，まず間違いない。ところが写本（とりわけハイデルベルク版）を見ると，前章でも示したように，杜撰といわれても仕方のない書写で韻律が処々で体をなしていない。また文意が通らない箇所も多い。この写本は本来，けっして安直に作成されたものでは

ない。ディーボルト・ラウバーのよく知られた写本工房で書かれ，46の挿絵も施されている。ハイデルベルク大図書館が公開しているサイトを開くと，それらの鮮やかな画像を閲覧できるだけでなく，各行の最初の文字に彩色が施されていることもわかる[55]。装飾的価値も高かったこと，すなわち贅を尽くしたものであることは疑いようがない。異論もあるが，高位の貴族が完成前に購入したとされる。だから文章の質も高いはずだと考えたくなるが，そうはならなかった。写字生は書写の際，一字一句の再現にさほど集中せず，韻律もあまり意識しないままテクストを書いたのである。

では完本3写本を比べると何がいえるだろうか。筆者はこれらが成立する以前，すなわち遅くとも15世紀前半までには，これらの祖型が出来上がっていたと考える[56]。その根拠は，第1にすべての版で筋立ての大枠が同じであること，第2にハイデルベルク版とウィーン版でほとんどのエピソードが共通していること，そして第3に配列の順序が異なる場合があることである。ビヨルン・ミヒャエル・ハルムスの精緻かつ視覚にうったえる分析のおかげで，私たちは今これら3写本の内容を明瞭に比較対照することができる[57]。筋立てと多くのエピソードが共通しているこれらがひとつの原形に由来することには異論がなかろう。したがって，大枠が一致するにもかかわらず配列の順番が異なる記述があることは，後の写字生が意図的に介入し，順番をずらしたことを示すといえる。（ドレスデン版は130詩節に縮小されているが，これもすでに指摘したように筋の展開に大きな違いはない。）おそらくどの写本の筆者も，文単位だけでなくエピソード単位で文言を変更したり配列を変えたりすることに，何の抵抗もなかったであろう。それは著作権の概念がない時代においては，まして物語文芸であれば，けっして咎められる行為ではなかった。それに加えて『ヴィルギナール』では，物語を構成して筋を展開させるべき各題材のつながりが有機的とはいい難い。写本が新たに書かれる場合，写字生の中には一つひとつの場面を独自に彫琢したり，あるいは新たなエピソードをつけ加えたりする者がおそらく多数いたのだろう。そうして書かれた結果，多様な異本が生まれたのである。中世後期に大きな広まりをみた「冒険叙事詩」や年代記の諸作品におけるヴァリエーションの大きさは，まさにそうした書記伝承のあり方を示す好例である[58]。ただしすでに述べたように，ハイデルベルク版の写字生たちはこのタイプではない。しかし彼らの典拠の写本がそうしたタイプの人物によって書かれた可能性はある。この点は今後も引き続き考えてゆきたい。

一方，他の文化圏の文芸作品と共通するモチーフがあると，作品自体だけでなくこれを取り巻く世界の理解も進めうる。例を挙げよう。第3章「内容」でも記したように，主人公ディートリヒの軍師ヒルデブラントは，竜の口に下半身をのみ込まれてしまったレントヴィンを救う（ハイデルベルク版147節9行～149節6行；ウィーン版266節9行～268節6行；ドレスデン版49節）。この「竜にのみ込まれかけた人物が助けを求めて叫び，通りがかりの者が救う」というパターンは『千夜一夜物語』のシンドバッドをめぐる語りにも見られる[59]。同じモチーフが異なる文化圏で共通に見られる例は，周知のように枚挙に暇がない。『千夜一夜物語』と英雄叙事詩で共通する素材としては，『ニーベルンゲンの歌』でよく知られる隠れ蓑もある[60]。このモチーフは日本でも民話でおなじみである。隠れ蓑と同じ効果をもつ「指輪」であれば，アーサー王物語やトロイ物語，さらに古代ギリシャの物語にまで遡る。これらの類似点を集めることですぐに素材史の研究に貢献できるわけではないが，個々の作品を文学のグローバルヒストリーという枠の中で考える場合には，地味ではあってもこうした基礎的な作業を続けることが不可欠であろう。

またウィーン版（V_{12}）222節の10-13行にはヒルデブラントが，女性の部屋で寝てばかりいるような主君は尊敬しない，と述べる場面がある。（ハイデルベルク版（V_{10}）では106節10-13行が対応する。）

so geb ich nit ein wicke	私は何も差し上げられません
umb einen jungen fúrsten nicht,	お若い主君には，
so man den selben alle czeit	もしこの方がいつ見ても
in frawen kammer schlaffen sicht.	女性の部屋で寝ているようでは。

冒険（âventiure）が何なのかまだ知らず，山の岩壁を見て「あれが冒険という名のものなの」（ハイデルベルク版21節４行Ist das oventüre genant?）と問うほど幼い主人公ディートリヒは，「年の上ではまだ子ども」（ハイデルベルク版70節１行ein kint，161節７行der jore gar ein kint；ウィーン版179節１行および280節７行；ドレスデン版29節11行）である。それは本文中でも形を変えて再三強調されている。したがって女色にふける若い主君がこのディートリヒをあてこすったものとは本来考えにくいが，引用文の直前まではディートリヒが異教徒を相手に奮戦し，これを追いやった経緯が記されている。脈絡が今一つつかみにくいのだが，様々な人から成る聴衆を楽しませる工夫がこらされた可能性はある[61]。ちなみにこの場面は，ハルトマン・フォン・アウエの『エーレク』で美しい妻と昼夜を分かたず同衾し続ける主人公から家来衆の心が離れてしまうエピソードを思い起こさせる[62]。これがよく知られているのは，エーレクが支配者としてこの危機を克服し，誰からも尊敬される騎士となる過程が作品の根幹をなすからである。類例は他にも多数あるが[63]，そもそも前近代においては，主君の「徳の高さ」やこれとは逆の「節操のなさ」はあらゆる文化圏でテーマ化されたことだろう。日本を含めて対象を広げれば，さらに多くの対応例を見出せるに違いない[64]。

中世ドイツ文学を研究するのであれば，その全体に知悉することが何より重要なのは論を俟たない。しかし異なる文化を背景に持つ者には独自の視点があってよいし，それがいわゆる本家本元の人々から期待されてもいる。写本伝承や校訂のあり方などは，日本文学などの研究成果と比較対照することにより独自の発信ができると思われる。2018年に始まる予定のプロジェクトでこの研究を進めることが現在の課題である。

注

1 原表記Virginalをドイツ語本来の発音規則（vはf音）にしたがって読むと「フィルギナール」となり，かつてはこのように発音されることもあったという。しかしこの語はラテン語のvirgo（乙女・処女）に由来することが間違いなく，今日では「ヴィルギナール」と発音される。この点を含め様々なご教示をいただいたエリーザベト・リーナート（Frau Prof. Dr. Elisabeth Lienert），ゾーニャ・ケアト（Frau Priv.-Doz. Dr. Sonja Kerth），エリーザ・ポンティーニ（Frau Elisa Pontini M. A.）の各氏に御礼を申し上げる。なおケアト氏によると，お名前の「ゾ」は（標準的とされる発音とは異なり）長母音である。従来誤った発音・表記をしていたことをお詫びする。

2 Deutsches Heldenbuch. 5. Teil. Dietrichs Abenteuer von Albrecht von Kemenaten nebst den

Bruchstücken von Dietrich und Wenezlan. Hrsg. von Julius Zupitza. Berlin: Weidmann 1870 (Nachdruck Dublin/Zürich: Weidmann 1968), S. 1–200. この版が『ヴィルギナール』(Virginal) という呼称を用いた。なお編者ツピツァはその解説V頁で，カール・ミュレンホフ (Karl Müllenhoff) の勧めによると述べているが，文献ではそれ以上の詳細を確認できなかった。

3 Joachim Heinzle: 'Virginal'. In: Die deutsche Literatur des Mittelalters. Verfasserlexikon. 2. Auflage. Hrsg. von Burghart Wachinger. Band 10. Berlin/New York: de Gruyter 1999. Sp. 385–388, hier Sp. 386.

4 後藤康文『堤中納言物語の真相』東京：武蔵野書院2017年，136・186頁。

5 Virginal. Goldemar. Hrsg. von Elisabeth Lienert/Elisa Pontini/Katrin Schumacher. Teilbande I–III. Berlin/Boston: de Gruyter 2017 (TSMH 10/I–III).

6「英雄叙事詩」(「英雄詩」) の定義については以下を参照されたい。寺田龍男「軍記物語と英雄叙事詩（5）－概念規定に関する諸問題－」『メディア・コミュニケーション研究』57 (2009)，35–54頁；中央大学人文科学研究所（編）『英雄詩とは何か』東京：中央大学出版部2011年（中央大学人文科学研究所研究叢書55)；中央大学人文科学研究所（編）『続英雄詩とは何か』東京：中央大学出版部2017年（中央大学人文科学研究所研究叢書64)。

7 大津雄一『『平家物語』の再誕—創られた国民叙事詩』東京：NHK出版（NHKブックス1206)，61–108頁。

8 雪山俊夫（訳）『ニーベルンゲンの歌』東京：岩波書店1939年（前篇)・1942年（後篇)。

9 上記雪山訳の他に服部正己（訳）『ニーベルンゲンの歌－ニベルンク族の厄難』丹波：養徳社1944年（改訂版東京：東洋出版1977年)；相良守峯（訳）『ニーベルンゲンの歌』東京：河出書房1952年前篇・後篇（世界文学全集古典篇第3巻中世叙事詩篇）（なお同書は1955年に岩波書店が文庫化し，1975年に改訳されている)；石川栄作（訳）『ニーベルンゲンの歌』東京：筑摩書房2011年前篇・後篇（ちくま文庫に10–1/2)；岡崎忠弘（訳）『ニーベルンゲンの歌』諏訪：鳥影社2017年が刊行されている。

10 木村靖二・佐藤次高・岸本美緒・油井大三郎・青木康・小松久男・水島司・橋場弦（著）『詳説世界史（世界史B)』東京：山川出版社2015年，153頁。

11 リーナートを中心とするグループは2003年の『ディートリヒの敗走』(Dietrichs Flucht. Textgeschichtliche Ausgabe. Hrsg. von Elisabeth Lienert/Gertrud Beck. Tübingen: Niemeyer 2003 (TSMH 1)) をはじめとする叢書「中高ドイツ語英雄叙事詩の校訂版と研究書」(Texte und Studien der mittelhochdeutschen Heldenepik [TSMH]) を刊行している。これまでに『ラヴェンナの戦い』(Rabenschlacht. Textgeschichtliche Ausgabe. Hrsg. von Elisabeth Lienert/Dorit Wolter. Tübingen: Niemeyer 2004 (TSMH 2)),『アルプハルトの死・ディートリヒとヴェネツラーン』(Alpharts Tod. Dietrich und Wenezlan. Hrsg. von Elisabeth Lienert/Viola Meyer. Tübingen: Niemeyer 2007 (TSMH 3)),『ラオリーン』(Laurin. Hrsg. von Elisabeth Lienert/Sonja Kerth/Esther Vollmer-Eicken. Teilbande I–II. Berlin/Boston: de Gruyter. 2011 (TSMH 6/I–II)),『ヴォルムスの薔薇園』(Rosengarten. Hrsg. von Elisabeth Lienert/Sonja Kerth/Svenja Nierentz. Teilbande I–III. Berlin/Boston: de Gruyter. 2015 (TSMH 8/I–III)),『怪物』(Wunderer. Hrsg. von Florian Kragl. Berlin/Boston: de Gruyter. 2015 (TSMH 9)) および『ヴィルギナール』(註5) を編纂し，現在『ズィゲノート』(Sigenot) の校訂作業を進めている。さらに複数の研究書 (Dietrich-Testimonien des 6. bis 16. Jahrhunderts. Hrsg. von Elisabeth Lienert unter Mitarbeit von Esther Vollmer-Eicken/Dorit Wolter. Tübingen: Niemeyer 2008 (TSMH 4); Elisabeth Lienert: Die ‹historische› Dietrichepik. Untersuchungen zu ‹Dietrichs Flucht›, ‹Rabenschlacht› und ‹Alpharts Tod›. Berlin/New York: de

Gruyter 2010 (TSMH 5); Björn Michael Harms: Narrative ‹Motivation von unten›. Zur Versionskonstitution von ‹Virginal› und ‹Laurin›. Berlin/Boston: de Gruyter 2013 (TSMH 7)) がこのシリーズで公刊されており，今後さらなる発展が期待される。(以下叢書類は可能な限り略号を用いる。)

12 Virginal. Goldemar (註5), S. 863-869.

13 Nibelungenlied und Nibelungensage. Kommentierte Bibliographie 1945-2010. Hrsg. von Florian Kragl. Berlin: Akademie 2012.

14 日本における『ニーベルンゲンの歌』の研究史については中島悠爾「日本における中世文学研究文献 (Ⅰ)」(『ドイツ文学』63号 (1979年) 121-135頁，134頁) による。その後は様々な視点が提起されているが小稿では割愛する。

15 岡崎 (註9), 1039頁。

16 エトヴァルト・シュレーダーは『ヴィルギナール』などを「二流三流の英雄文芸作品」(Heldendichtungen zweiten und dritten Ranges) とみなしている。Vgl. Edward Schröder: Bruchstücke einer neuen Fragmenths. der Virginal. In: Zeitschrift für deutsches Altertum 73 (1936). S. 270-276, hier S. 272.

17 Beate Schmolke-Hasselmann: Der französische Artusroman in Versen nach Chrétien de Troyes. In: Deutsche Vierteljahrsschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte 57 (1983). S. 415-430, hier S. 418.

18 例としてKarl Otto Brogsitter: Artusepik. 2., verbesserte und ergänzte Auflage. Stuttgart: Metzler 1971 (SM 38), S. 117. 少し時代は下るが，ペーター・K・シュタインは「『ヴィルギナール』のような作品を再評価する試みなど止めた方がよいと親しい友人から忠告された」とリアルに報告している。Vgl. Peter K. Stein: 'Virginal'. Voraussetzungen und Umrisse eines Versuchs. In: Jahrbuch der Oswald von Wolkenstein-Gesellschaft 2 (1982/83). S. 61-87, hier S. 61.

19 Stein (註18), S. 61. 同様の印象を語る人は今日でもいる。

20 Virginal. Goldemar (註5), S. 3-22.

21「軍師」(仮訳) の原表現はmeisterで，現代ドイツ語では通常Waffenmeisterと訳される。このWaffe(n) は「武器・武力」の意味であるため，いわゆる徒弟制度の「親方」ではない。もちろん第2次世界大戦当時の意味 (兵器係の下士官) でもない。Waffenmeisterはラテン語のmagister militum (Heermeister) に対応し，「軍司令官」が一義的な意味である。したがってここでのmeisterは，現代の日本社会でしばしば想起されるであろう「軍師・黒田官兵衛」などとは性質を異にする。中世ドイツの英雄叙事詩ではほぼヒルデブラントのみに付される称号である。(『ニーベルンゲンの歌』に登場し，同じような位置に立つハゲネにも時折 [scar] meister (部隊長，船頭) の役割が与えられる。Das Nibelungenlied und die Klage. Nach der Handschrift 857 der Stiftsbibliothek St. Gallen. Mittelhochdeutscher Text, Übertragung und Kommentar. Hrsg. von Joachim Heinzle. Berlin: Deutscher Klassiker Verlag 2013 (Bibliothek des Mittelalters 12), Strr. 172-4, 199-1, 1572-3および岡崎訳 (註9) を参照。しかしヒルデブラントの場合のように敬称として用いられる例はない。) なおディートリヒは父ディートマールを早くに失っており，ヒルデブラントが養育係を兼ねている。とくに『ヴィルギナール』(および『ディートリヒの敗走』と『ラヴェンナの戦い』) では若いディートリヒが様々な経験を重ねる次第が主題であるため，ヒルデブラントも保護者・教育者として描かれる傾向が他の作品よりも強い。

22 Werner Hoffmann: Mittelhochdeutsche Heldendichtung. Berlin: Schmidt 1974 (Grundlagen der

Germanistik 14), S. 203; Joachim Heinzle: Einführung in die mittelhochdeutsche Dietrichepik. Berlin/New York: de Gruyter 1999, S. 137; Elisabeth Lienert: Mittelhochdeutsche Heldenepik. Eine Einführung. Berlin: Schmidt 2016 (Grundlagen der Germanistik 58), S. 127; Virginal. Goldemar（註５), S. 27.

23 従来は写本に欠けている一葉にあったはずの５詩節も含めて866節あるものとみなされてきたが，ブレーメングループはこれを正確には数値化できないという理由で算入しない（Virginal. Goldemar.（註５), S. 30およびS. 496)。その見解に従う。

24 Virginal. Goldemar（註５), S. 3–22.

25 Heinzle: Einführung（註22), S. 139.

26 Heinzle: Einführung（註22), S. 144.

27 Heinzle: Einführung（註22), S. 100–103.

28 なお原文では２行目のwuohsの綴りが異なり，母音uの上にoが書かれている。しかしここでは便宜上uの右にoを置く。（以下同様。）

29 この文では６行目のdesと前文のつながりがはっきりしないので，ドレスデン版（V_{11}）の対応する記述（第２節 6–8 行：Also schid er von dane / wol von den purgen in den t‹*han*›, / erwerben preiss und ere.「かくして彼はその時から，賞賛と名誉を得るため，城を離れて森に入るようになった。」）を参照した。

30 Julia Weitbrecht: Transformation zum Helden. Der strophische ›Herzog Ernst‹ (G) im ›Dresdener Heldenbuch‹ (1472). In: 12. Pöchlarner Heldenliedgespräch. Spuren der Heldensage: Texte – Bilder – Realien. Hrsg. von Johannes Keller/Florian Kragl/Stephan Müller. Wien: Fassbaender 2015 (Philologica Germanica 36), S. 279–302.

31 Heldenbuch. Altdeutsche Heldenlieder aus dem Sagenkreise Dietrichs von Bern und der Nibelungen. Meist aus einzigen Handschriften zum erstenmal gedruckt oder hergestellt. Hrsg. von Friedrich Heinrich von der Hagen. Leipzig: Schultze 1855.（Nachdruck Hildesheim/New York: Olms 1977). 2. Band, S. 103–508. 作品には『ディートリヒと家来衆』(Dietrich und seine Gesellen）という題が付された。

32 Deutsches Heldenbuch（註２), S. VI.

33 ただしシュタインは写本（V_{10}）を見てはおらず，他作品の校訂のあり方からフォン・デア・ハーゲンを批判している。そしてツピツァの校訂版は改変が少ないと述べる。Stein（註18), S. 63。抽出調査の結果ではあるが，フォン・デア・ハーゲンの校訂版とツピツァの校訂版を比べると，前者の方が写本テクストに近いと筆者は判断している。

34 Deutsches Heldenbuch（註２), S. XIII.

35 Joachim Heinzle: Mittelhochdeustche Dietrichepik. Untersuchungen zur Tradierungsweise, Überlieferungskritik und Gattungsgeschichte später Heldendichtung. München: Artemis 1978 (MTU 62), S. 213.

36 Der Helden Buch in der Ursprache. Hrsg. von Friedrich Heinrich von der Hagen/Alois Primisser. 2. Theil. Berlin: Reimer 1825, S. 141–159. なお本書では校訂者フォン・デア・ハーゲンが作品に『ディートリヒと家来衆』(Dietrich und seine Gesellen）という題を与えている。（その後註31に挙げたV_{10}写本の校訂版にも同じ標題をつけた。）2006年にはヴァルター・コーフラーが新たな校訂版を刊行している。Das Dresdener Heldenbuch und die Bruchstücke des Berlin-Wolfenbütteler Helden-

buchs. Edition und Digitalfaksimile. Hrsg. von Walter Kofler. Stuttgart: Hirzel 2006, S. 360–392. ブレーメン大グループの新版では異なる読み方が多数提案されているが,「ドレスデン英雄本」の収録作品すべてだけでなく,現存する最古の英雄本であるベルリン・ヴォルフェンビュッテル断片写本(V3)まで校訂・編纂したコーフラーの功績は大きい。

37 Dietrichs erste Ausfahrt. Hrsg. von Franz Stark. Stuttgart: Litterarischer Verein in Stuttgart 1860. 本書では作品名が『ディートリヒの初陣』(Dietrichs erste Ausfahrt)とされている。なお小稿冒頭で挙げたもう一つの呼称『ディートリヒの竜退治』(Dietrichs Drachenkämpfe)はモーリッツ・ハウプトによる。Vgl. Moriz Haupt: Aus Dietrichs drachenkämpfen. In: Zeitschrift für deutsches Altertum 6 (1848). S. 308–310, hier S. 308.

38 中世後期に数多く書かれ,また印刷もされた英雄本について日本ではまだ包括的な研究がなされていない。Hoffmann(註22), S. 45–47; Joachim Heinzle: 'Heldenbücher'. In: Die deutsche Literatur des Mittelalters. Verfasserlexikon. 2. Auflage. Band 3. Hrsg. von Kurt Ruh. Berlin/New York 1981, Sp. 947–956; ders: Einführung(註22), S. 41–50; Lienert: Mittelhochdeutsche Heldenepik(註22), S. 163–168の他,寺田龍男「「リーンハルト・ショイベルの英雄本」に関する諸問題—日本人ゲルマニストの視点から—」『北海道大学教育学研究院紀要』118号2013年179–193頁もご参照いただければ幸いである。

39 Das Eckenlied. Sämtliche Fassungen hrsg. von Francis B. Brévart. Teil 1. Tübingen: Niemeyer: 1999 (ATB 111), Str. 24, 1–3.

40 Pfaffe Lambrecht: Alexanderroman. Mittelhochdeutsch/Neuhochdeutsch. Hrsg., übersetzt und kommentiert von Elisabeth Lienert. Stuttgart: Reclam 2007 (RUB 18508), S. 112 (Vorauer Alexander, v. 922f.), S. 204 (Straßburger Alexander, v. 849f.) und S. 584. なおこの作品には以下の論考がある。四反田想「『司祭ラムブレヒトのアレクサンダーの歌』(1)(シュトラースブルクのアレクサンダー)」『長崎大学教養部紀要人文科学篇』28巻1号1987年33–44頁;横山江美「初期宮廷叙事詩のオリエント像—『シュトラースブルクのアレクサンダーの歌』—」『セミナリウム』21号1999年 1–23頁。

41 渡邊徳明「13世紀における『ニーベルンゲンの歌』の受容」『ドイツ文学』107号2001年115–125頁および同「『ヴォルムスの薔薇園』の裏切り者ヴィテゲ—ディートリヒ歴史叙事詩との関連から—」『慶應義塾大学日吉紀要(ドイツ語・ドイツ文学)』44号2008年79–106頁を参照。

42 Stein(註18), S. 62ff.; Heinzle: Mittelhochdeustche Dietrichepik(註35), S. 217–219; George. T. Gillespie: Hildebrands Minnelehre. Zur Virginal h. In: Liebe in der deutschen Literatur des Mittelalters. St. Andrews Colloquium 1985. Hrsg. von Jeffrey Ashcroft/Dietrich Huschenbett/William Henry Jackson. Tübingen: Niemeyer 1987. S. 61–79, hier S. 62.

43 Wilhelm Wilmanns: Über Virginal, Dietrich und seine Gesellen, und Dietrichs erste Ausfahrt. In: Zeitschrift für deutsches Altertum 15 (1872), S. 294–309.

44 Wilmanns(註43), S, 296f.

45 Carl von Kraus: Virginal und Dietrichs Ausfahrt. In: Zeitschrift für deutsches Altertum 50 (1908), S. 1–123.

46 Hugo Kuhn: Virginal. In: Dichtung und Welt im Mittelalter. 2. Auflage. Stuttgart: Metzler 1969, S. 220–248, 283–297. [Erstveröffentlichung: Beiträge zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur 71 (1949), S. 331–386].

47 ヴィルマンス,フォン・クラウス,クーンの説に批判的で重層構造の再現は不可能とするハインツレも,重層性自体は疑いようがないと今も考えている。Heinzle: 'Virginal'(註3), Sp. 386.

48 ディートリヒ叙事詩諸作品の写本・印刷本の本文における様々な問題については以下の論文が総括している。Elisabeth Lienert: Konzeptionelle und praktische Probleme der Dietrichepik-Edition. In: Überlieferungsgeschichte transdisziplinär. Neue Perspektiven auf ein germanistisches Forschungsparadigma. In Verbindung mit Horst Brunner und Freimut Löser hrsg. von Dorothea Klein. Wiesbaden: Reichert 2016 (Wissensliteratur im Mittelalter 52), S. 389-399.

49 Stein (註18), S. 84f.; Werner Hoffmann: Die Dietrichepik. In: Geschichte der deutschen Literatur des Spätmittelalters. Hrsg. von Wolfgang Spiewok. Greifswald: Reineke 1997. S. 237-294, hier S. 277f.; Florian Kragl: Heldenzeit. Interpretation zur Dietrichepik des 13. bis 16. Jahrhunderts. Heidelberg: Winter 2013 (Studien zur historischen Poetik 12), S. 331-335.

50 Gillespie (註42); Cordula Kropik: Dietrich von Bern zwischen Minnelehre und Fürstenerziehung. Zur Interpretation der Virginal h. In: Jahrbuch der Oswald von Wolkenstein-Gesellschaft 14 (2003/04), S. 159-173; Dietmar Peschel-Rentsch: Schwarze Pädagogik – oder Dietrichs Lernfahrt: *er weste umb âventiure nicht*. Hildebrands Erziehungsprogramm und seine Wirkung in der Virginal. In: ders.: Pferdemänner. Sieben Essays über Sozialisation und ihre Wirkungen in mittelalterlicher Literatur. Erlangen/Jena: Palm und Enke 1998 (Erlanger Studien 117), S. 176-202.

51 Sonja Kerth: Helden en mouvance. Zur Fassungsproblematik der Virginal. In: Jahrbuch der Oswald von Wolkenstein-Gesellschaft 14 (2002/04), S. 141-157; dies.: Gattungsinterferenzen in der späten Heldendichtung. Wiesbaden: Reichert 2008 (Imagines Medii Aevi 21).

52 Timo Reuvekamp-Felber: Briefe als Kommunikations- und Strukturelemente in der ›Virginal‹. Reflexionen mittelalterlicher Schriftkultur in der Dietrichepik. In: Beiträge zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur 125 (2003), S. 57-81; Katharina Philipowski: Sprechen, Schreiben und Lieben in der Virginal. Die Heidelberger Fassung als Beispiel literarischer Metakommunikation. In: Euphorion 102 (2008), S. 331-362.

53 Cordula Kropik: Heldenepik im Bild. Zu Diebold Laubers Illustrierung der ›Virginal‹. In: Aus der Werkstatt Diebold Laubers. Hrsg. von Christoph Fasbender. Berlin/Boston: de Gruyter 2012 (Kulturtopographie des alemannischen Raums 3), S. 99-121 (Tafel 6).

54 Harms (註11).

55 URL: http://digi.ub.uni-heidelberg.de/diglit/cpg324 (2017年9月26日確認。)

56 それどころかギレスピーは，ハイデルベルク版（おそらくV_{10}の原形のことであろう）が1300年頃すでに存在したと断定している。Gillespie (註42), S. 62.

57 Harms (註11), S. 300-322.

58 ディートリヒ叙事詩に関してはHeinzle: Mittelhochdeustche Dietrichepik (註35), S. 170-174を参照。なお異本が成立する同様の可能性については，日本文学研究においても，すでに津田左右吉『文学に現はれたる我が国民思想の研究』（三）東京：岩波書店1977年（岩波文庫33-140-3）57-88頁（初出1917年）が指摘している。

59『完訳千一夜物語』（五）豊島与志雄・渡辺一夫・佐藤正彰・岡部正孝（訳）東京：岩波書店1988年（岩波文庫赤780-5］365頁（マルドリュス版）および『バートン版千夜一夜物語』第7巻大場正史（訳）東京：筑摩書房2004年（ちくま文庫せ-9-7）134頁。

60『ニーベルンゲンの歌』の97節では，ハゲネの口から，ジーフリトがアルブリーヒから奪い取ったと伝えら

れる。後にはこの隠れ蓑の魔力により，ジーフリトはグンテルを助けてアイスランドの女王ブリュンヒルトを娶り，また屈服させることに成功する。同じ魔力をもつ隠れ蓑は，『完訳千一夜物語』（八）豊島与志雄・渡辺一夫・佐藤正彰・岡部正孝（訳）東京：岩波書店1988年（岩波文庫赤780-5）421-425頁（マルドリュス版）および『バートン版千夜一夜物語』第 9 巻大場正史（訳）東京：筑摩書房2004年（ちくま文庫せ-9-9）393-397頁でも素材となっている。

61 竜にのみ込まれかけたレントヴィン（Rentwin）が，ウィーン版（V_{12}）でロートヴァイン（Rotwein：赤ワイン）という名に変えられているのはその一例と解しうる。またドレスデン版（V_{11}）末尾の特異な筋立て（上述）も，改作者は同様の効果を狙ったのであろう。

62 Hartmann von Aue: Erec. Hrsg. von Albert Leitzmann, fortgeführt von Ludwig Wolff. 6. Auflage besorgt von Christoph Cormeau/Kurt Gärtner. Tübingen: Niemeyer 1985（ATB 39）, V. 2924-2998（平尾浩三（訳）『エーレク』（平尾浩三・中島悠爾・相良守峯・リンケ珠子（訳）『ハルトマン作品集』東京：郁文堂1982年 1-159頁）48-49頁）。

63 たとえばハインリヒ・フォン・ミュンヘンの『世界年代記』では，皇帝クラウディウスが母親を殺害した上他人の妻女と寝所でふけりローマの人々は苦しんだ，と徳操なき支配者を非難する定型表現が見られる。Die Weltchronik Heinrichs von München. Neue Ee. Hrsg. von Frank Shaw/Johannes Fournier/Kurt Gärtner. Berlin: Akademie 2008（DTM 88）, S. 238.

64 日本でも1308年頃中原政連が北条貞時に宛てて執筆した『平政連諫草』（実際には草稿だったらしい）に，「時々偃息（おそく）の志あり。日々政務に接（まじわ）りがたきのよし思食（おぼしめ）さるるか」（時々女性と同衾なさっておられるが，政務をとるのがいやだとお思いなのですか）という文がある。佐藤進一（校注）『平政連諫草』（佐藤進一・網野善彦・笠松宏至『日本中世史を見直す』東京：平凡社1999年215-233頁），218頁。訳文は同書32・33頁による。

【謝辞】

本研究はJSPS科研費15K02399および平成29年度北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院補助金の助成を受けたものである。

Status of Research on 'Virginal' : History, Present and Future —On the new Edition by the Bremen Scholars—

Tatsuo TERADA

Key Words

Virginal, Heroic Poetry, Manuscripts, Edition

Abstract

In 2017, the authors of the Bremen University Working Group — Elisabeth Lienert, Elisa Pontini and Katrin Schumacher — published a new edition of three manuscripts of 'Virginal', a German Heroic Epic, including the fragment of 'Goldemar'. It is to be expected that the publication of this meticulously edited volume, which replaces the editions of Franz Stark (1860) and Julius Zupitza (1870), will lead to a revision of past research achievements. At the same time, the new edition will stimulate the interest of scholars to pursue research on various topics such as the formation of diverse versions, ***Minne*** didactics and genre interferences, for which they now have a philologically sound base.

The editors have pointed out numerous errors with regards to incorrect words, sentences and metric structures that were found in the Heidelberg Manuscript (1444—48), which was written in the Diebold Laubers workshop in Haguenau, Alsace. Lienert, Pontini and Schumacher propose either one or several ways to reconstruct the correct expressions. Neverthless, we have to learn how to deal with such manuscripts which are full of errors because the same problem can be found in written letter cultures all over the world.

As a non-German researcher of another cultural background I would like to propose to reflect upon phenomena ranging from uncocentrated copying to conscious changing of texts through the lense of Cultural Studies. Reflections on differences and similarities with regards to the formation and written transmission of manuscripts would surely be conducive to learning more about the mechanisms of manuscript writing. A related group research will begin in 2018.